

いたらしく、二つともテーブルに置いた。「えっと、そ、それで、よ、四階にいたら、ノブオくと、セイゴくんが、上ってきたんだ」

シンジロウがそのタカヒロの様子を上げ上げ見つめながらうなずいた。

「なるほど。そのとき残ってた数字は覚えてる？」

「え、えっと、た、確か、三番だったかな。い、一番がなかったのは、覚えてる。たぶん、二番も」

「そうか。おそらくケンイチくんのすぐ後だったんだね。じゃ、セイゴくんは？」

「あー……：……どうだったっけな。この庭に入って、すぐドアくぐっただろ。椅子は覚えてねえな。一階をうろついてたら割とすぐノブオのやつと階段で会った。エレベーターが動かねえってんで、とりあえず見に行って、四階でタカヒロに会った。ああ。一階で一服つけて四階で吸い終わったから、階段上がってた時間は五分かそこらだろ。十分もかかってねえな」

「タカヒロくんはしばらく屋上や四階にいたんだよね。逆算すると、セイゴくんの到着はタカヒロくんの後っていう感じだけど。金庫は開けてみた？」

「あ、そっか。それで順番が分かるもんな。開けたぜ。タカヒロと同じで三番だったはずだ。それ見て、時間があるって俺も思ったし、少なくとも二人来てるなって考えたんだ。てことは俺が来たのはサトシとケンイチとタカヒロの後で、ミツエの前、四番が喫